

# 井尻 B 遺跡 11

—市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告 I—

井尻 B 遺跡第14次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第736集

2003

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘を挟んで朝鮮半島と向き合う福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されていますが、それらを保護し子孫に伝えていくことは私達の義務であります。しかし近年の都市開発によってそれらの多くが失われているのが現状です。

福岡市教育委員会は、このように開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財に関して事前の発掘調査を行い、できる限りの記録の保全と調査結果の公開に努めています。

本書は市道御供所井尻線建設に伴う南区井尻B遺跡の発掘調査について報告するものです。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘と調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々のご御理解と御協力を賜りましたことに関しまして心から謝意を表する次第でございます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

## 例言

1. 本書は1999年11月24日から2000年2月29日までの開発掘調査を行った井尻B遺跡第14次調査の報告書である。
2. 本書で使用した遺構実測図の作成は屋山洋が、遺物実測図の作成は井上加代子と屋山が行った。
3. 本書で使用した遺構・遺物の写真撮影は屋山が行った。
4. 本書で使用した方位は磁北である。
5. 挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
6. 本書に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。

調査番号	9958	遺跡略号	IZB-14
調査地番	南区井尻1丁目地内	分布地図番号	井尻 25
開発面積	1804㎡	調査実施面積	952㎡
調査期間	991124~000229	事前審査番号	11-1-1

## 目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
3.	遺跡の立地と環境	4
II	調査の記録	4
1.	調査の経過と概要	4
2.	調査の記録	折込み
3.	小結	17

## 挿図目次

第1図	井尻B遺跡群の位置	2
第2図	井尻遺跡群北側発掘調査地点位置図	3
第3図	調査区位置図	3
第4図	調査区全体図	折込み
第5図	SBO1遺構実測図	折込み
第6図	SROO19実測図	6
第7図	SEOO19遺物実測図	7
第8図	足跡痕跡実測図	8
第9図	SXOOO1・SXOO24実測図	8
第10図	その他の遺構出土遺物	9
第11図	包含層出土遺物1	11
第12図	包含層出土遺物2	12
第13図	包含層出土遺物3	13
第14図	包含層出土遺物4	14
第15図	包含層出土遺物5	15
第16図	包含層出土遺物6	16
第17図	包含層出土遺物7	17
第18図	包含層出土遺物8	18
第19図	包含層出土遺物9	19

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成11年3月31日に土木局建設部南部建設課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課宛に南区井尻1・2丁目地内に新設する市道御供所井尻線建設に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号11-1-1)。申請地のうち井尻1丁目地内は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻B遺跡内に位置していることから、埋蔵文化財課では埋蔵文化財の有無を確認するための試験調査が必要であると判断したが、当地区は住宅地で立ち退き等が進んでおらず、また道が狭く大型工事車両の通行が困難であった。今回14次調査を行った地点は井尻B遺跡群の南端に位置しているが、以前は井尻公園住宅の敷地内であり、その建物建て替えに伴い平成3年12月3日に既に試掘が行われていた。その結果では弥生土器、須恵器、瓦などが出土するとともにG L下180cmの白色粘土層上面で遺構が確認され、また公園住宅建て替え時の発掘調査においても包含層から多量の遺物が出土するなどその重要性が確認されたため、本調査地点においても事前の発掘調査が必要であると判断し、報告した。その後道路予定地に隣接する13次調査においても遺構が確認され遺跡が台地全体に広がることか確認された。この後、道路予定部分の既存建物の撤去の見通しがたったことなど事業が進捗してきたことから南部建設課との協議を進めたところ、まず遺跡の南端に位置し南側道路予定地が更地になっており、敷地内についても既存建物の撤去が完全に済んでいた本調査地点から調査を始めることとなり、平成11年11月24日から平成12年2月29日まで発掘調査を行った。

翌年度の平成12年6月からは本調査区北側に隣接する台地上の発掘調査を行ったが道路が狭いため南側から順に調査を行う事となった。その後担当職員が増えたため台地の南北両端から中央に向かって調査を進めることとなり、調査次数が混乱するおそれがあったため台地上の調査全体を17次調査とし、それを現生活道路で区切られたブロックを一単位とし南端のA区から北端のD区までを設定して平成12年度にA・F区、13年度にB・C・D・E区、14年度にC区残り部分の調査を行った。それによって得た成果は平成14年7月13日に出土遺物に関する新聞発表を行うことができた。平成14年夏以降井尻B遺跡群の北側台地上に位置する五十川遺跡群の発掘調査へと移行したが弥生時代前期の集落など井尻B遺跡に繋がっていくと思われるより古い遺構が確認されている。

## 2. 調査の組織

調査委託	土木局建設部南部建設課		
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課		
調査総括	埋蔵文化財課 課長	山崎純男	
	調査第1係長	(前) 山口譲治 (現) 力武卓治	
調査庶務	文化財整備課	宮川英彦	
調査担当	埋蔵文化財課 事前審査	中村啓太郎	
	調査第1係	屋山洋	
調査作業員	瀬戸啓治	小池丸嘉人 三浦力 村本義夫	石川さやか 池聖子 大宮輝子
小池温子	小路丸良江 小路智江 指原始子	田端名穂子	水口優子 中村幸子 花田則子
増田ゆかり	川崎朋子	一ノ瀬フミヨ 徳水静雄 谷英二	谷正則 上野龍夫 廣田安平
吉住政光	加藤常信		



- 1 井尻B遺跡
- 2 依居遺跡
- 3 東那珂遺跡
- 4 比惠遺跡
- 5 那珂遺跡
- 6 五十川遺跡
- 7 那珂君休遺跡
- 8 板付遺跡
- 9 高畑遺跡
- 10 踏岡A遺跡
- 11 踏岡B遺跡
- 12 筑原遺跡
- 13 二筑遺跡
- 14 南八幡遺跡
- 15 井尻A遺跡
- 16 寺島遺跡
- 17 横子遺跡
- 18 大橋B遺跡
- 19 三宅C遺跡
- 20 三宅B遺跡
- 21 野多C遺跡
- 22 山佐遺跡
- 23 弥永原遺跡
- 24 日佐原遺跡
- 25 須玖遺跡群
- 26 河本遺跡群

第1圖 井尻B遺跡群の位置 (1/25,000)



第2図 井尻島群北側発掘調査地点位置図 (1/10,000)



第3図 調査区位置図 (1/1,000)

### 3. 遺跡の立地と環境

井尻B遺跡群は福岡平野中央部を博多湾に向かって流れる那珂川の右岸に沿って細長く伸びる台地上に位置する。この台地上には数多くの遺跡が存在する。台地の南側は春日市と接しているが、その春日市内には須玖永田遺跡や須玖坂本遺跡等の青銅器製造関連の遺構・遺物が出土する遺跡が存在しており、江戸時代から鑄型が出土することが知られていた。ここ井尻周辺においても江戸時代に青銅器の鑄型が出土しており、奴国の青銅器生産を支える工房のひとつとして注目されてきた。

福岡市教育委員会の発掘調査においても鑄型だけではなく、鑄型に使用された石英長石斑岩の破片が多く出土するため、多くの青銅器が生産されていた可能性が高いと考えられている。このように本遺跡では以前から重要な遺構が存在する可能性がいわれられてきた。しかし、大正13年に九州鉄道（当時）の福岡～二口市間の電車道が開通して井尻駅ができると周辺は宅地化が進んだ。特に昭和20年代からは人口が急激に増加し、住宅地としての小規模な開発が進んだ結果台地上の道は細く曲がりくねったままで車の進人が困難なため、近年の大規模開発の波からはずれ発掘調査も周辺での小規模なものに限られたため、遺跡の全容を把握することができなかった。

古代の遺構についても青銅器同様古くから瓦が出土することは知られており、大正13年には前述した鉄道の切り通しに露出した瓦包含層についての中山平次郎の報告がある。福岡市の発掘調査では、1992年に行われた第3次調査で南北方向の溝が検出され多くの瓦が出土した。これら当時の調査から一辺が100mの範囲が遺構の分布予想範囲として設定されている。

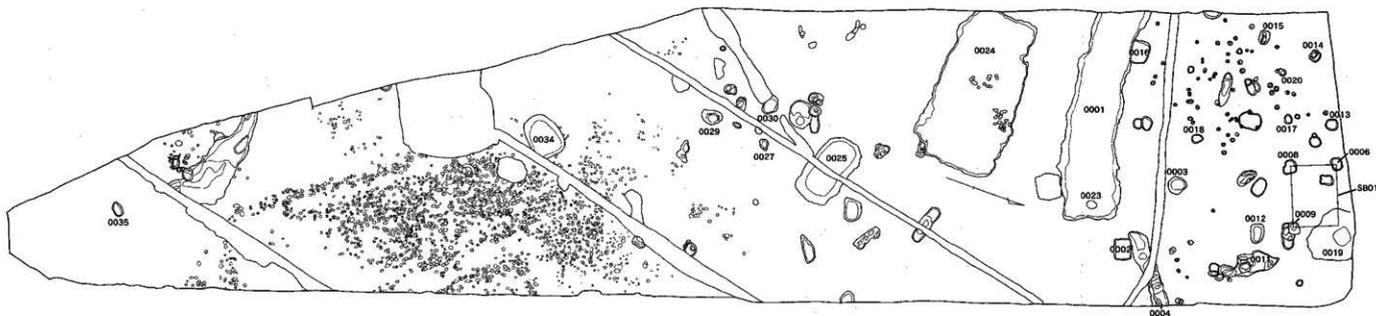
井尻B遺跡のこれまでの発掘調査の概要を述べると時期は旧石器から古代の遺構が確認されている。旧石器は主に台地の南端部（西鉄大牟田線より南側）で確認されている。北側では後世の遺構から石器が出土するものの原位置を留めるものは知られていない。弥生時代では台地の北西端で夜臼式土器や板付Ⅱ式土器の破片が出土しているが、確実な遺構としては中期前葉の城ノ越式期の貯蔵穴が最も古い遺構である。その後、中期中頃の須玖Ⅰ式期までは遺構の数は少ないものの後世の遺構から当時代の遺物が多く出土するため遺構の多くが削平されたものと思われる。後期後半になると遺構は台地全体で検出されるようになり、弥生時代終末までに多くの竪穴式住居が建てられる。この時期には大規模な集落が形成されるだけでなく、青銅器やガラス製品の生産など工房的な様相を示すようになる。古墳時代になると竪穴式住居などの生活遺構は造られなくなる。

7世紀末から8世紀初頭には台地中央部で寺院・官衙的建物が建設される。その時期の遺構は台地北端の22次調査や南端に近い6次調査でも確認されており、台地全体に広がることが判明してきた。この時期の瓦が出土する遺跡是那珂川左岸の三宅庵寺があり、右岸では那珂遺跡、高畑遺跡など数多く分布している。

## II 調査の記録

### 1. 調査の経過と概要

本調査地点は南北方向に長い台地の東端部分で東側に開く谷の中に位置する。北側の台地上との高低差は約2mを測るが、昭和30年頃の井尻公園住宅建設時に台地とほぼ同じ高さまで盛り上を行っている。調査はこの盛り土を重機で剥ぎ、以前の水面まで掘り下げることから開始した。盛り土置き場の関係から調査区を北側のⅠ区と南側のⅡ区に分け、99年11月24日にⅠ区の表土剥ぎを開始し、公園住宅建設以前の水田床土までを除去した。その後は遺物包含層である黒色土上面まで人力で剥いで遺構検出を行ったが、包含層上面では遺構を確認できなかったため、引き続いて掘り下げを行った。



第4図 調査区全体図 (1/200)

北側の台地縁部ではピット状遺構を数個と古墳時代初頭の井戸1基を確認した。遺構検出面は北側の台地落ち際が八女粘土で、南側には下層の褐色砂層が露出している。谷部最下層は暗茶褐色土中でアシ科植物の地下茎が見られたがその上に堆積した青灰色クライ砂と灰白色粘質土（八女粘土の再堆積か）の上面で遺構を確認した。灰白色粘質土の上層には厚さ20cm前後の黒色土が堆積しており、北側の台地側ではこの黒色土中に多量の遺物を含んでいた。12月中旬にI区の調査を終了し、打って返しを行い、引き続きII区の調査を開始した。I区と同様に水田床土まで削いだ後、人力で黒色土を掘り下げたが遺物はほとんど出土していない。黒色土下の白色シルト層上面でウシと思われる偶蹄類の足跡を確認した。その後、2000年2月末に調査を終了した。

## 2. 調査の記録

### 1) 弥生時代～古墳時代の遺構

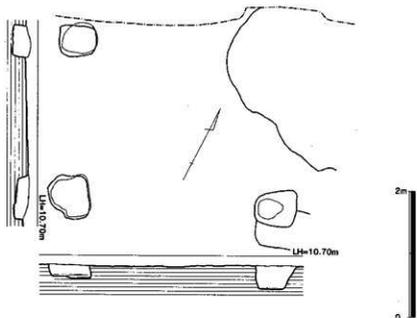
弥生時代と思われる掘立柱建物1基と古墳時代初頭の井戸1基を検出した。

#### (1) 掘立柱建物

**SBO1** 調査区の北端で検出した。現状で1間×1間で北側が調査区外に伸びる可能性がある。柱間は南北が250cm、東西が330cmを測る。遺物は出土していないが北東端をSE0019に切られており、古墳時代初頭以前の建物である。

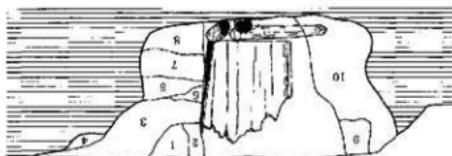
#### (2) 井戸

**SE0005** 調査区の北東端で検出した。北西端を排水用の溝に切られる。平面形はいびつな円形を呈し、掘り方直径は最大で277cmを測る。掘り方は一段円形に掘り下げた後、中心部を楕円形に掘り下げ、井筒を設置している。上半部は漏斗状にすぼまるが下半部はほぼ垂直に掘り下げており、底面の深さは検出面から88cmを測る。底面に径10cm、長さ55～60cm前後の木材4本をコの字型に並

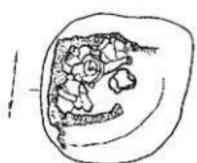
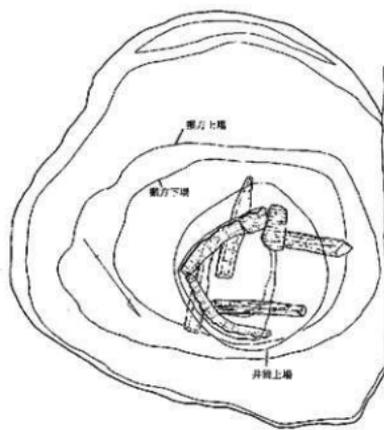


第5図 SBO1遺構実測図 (1/60)

べた上に井筒を置いており、井筒の底は井戸底面から10cm程離れている。井戸掘り方の土層は、北東側は明瞭ではないが南東側では15cm前後の厚さの黄白色粘土ブロックと灰色粗砂が交互に堆積している。井筒直径は75cmを測り、平面形は半円もしくは三角形を呈していたと思われる。井筒の木材が緩く弧を描いていることや、掘り方埋土である黄白色粘土のラインもそれと同様に丸みを帯びているため井筒は半円形であった可能性が高いと思われる。南東部の半円頂部には隙間があり三角形の頂点の縁に見えるのは土圧による破砕と考えられる。北西側の枠板は井戸廃棄時に抜かれており、木材の一部のみしか遺存していない。井筒の木材は底部で厚さ10cmを測る。井筒内の覆土は井戸底面から井筒底部までの隙間に黒褐色の砂混じり土が堆積しており、その上は約30cmの厚さの黒褐色土(3層)、その上に10cmの砂層(2層)と最上層の黒色土(1層)が堆積していた(第6図井筒内土層及び遺物出土状況図)。中間の砂層からは遺物は出土していないが、1層と3層の黒褐色土からは甕の破片がまとまって出土している。3層の最下部からは多量の上器細片と共に木器(第7図 O11)や皮袋形土製品、桃の種が1点出土している(図版4 110)。桃の種の大きさは高さ2.8cm、幅2.3cmを測る。井戸を埋める時の祭祀に使用したと考えられる。遺構検出面の地山は八丈粘土かその再堆積と思われる白色シルトで、検出面から32cmの深さで褐色の硬砂層に変わる。調査中も硬砂層からは水が湧き出し井筒の底から井筒内に流れ込んでいた。出土遺物(第7図 O01~O11)。O01~O07は甕である。O01は井戸下層から出土した。口径17cm、器高26.5cmを測る。外面は口縁は横ナデ、胴部はハケ後ナデを施す。肩部に4本の沈線(線)を施す。内面胴部はヘラケズリで頸部と底部に指オサエ。外面は全体に煤が付着する。胎土は2mm以下の砂を含む。O02は復元口径18.5cmを測る。外面は胴部下半にやや太いハケ目を施す。内面は胴部は丁寧なヘラケズリで口縁は内外面とも横ナデである。外面の胴部下半に煤が厚く付着する。胎土は径3mmほどの砂を多く含み浅黄褐色を呈す。O03は復元口径15.2cmを測る。外面は胴部上半に横方向、下半に縦方向のハケ目を施す。内面は丁寧なヘラケズリである。胴部下半に煤が付着。胎土は2mm以下の砂を多く含み、やや黄味がかかった淡灰色を呈す。O04は復元口径15.1cmで下半部を欠く。褐灰色で1mm以下の細かな白色砂を多量に含む。調整は外面がタタキ、内面は丁寧な削りを施す。外面に黒斑がみられる。O05は井戸の上層から出土した。復元口径15.6cmを測る。淡黄褐色で1mmほどの砂を多く含む。胴部外面は剥離しており調整不明。内面は削りであるが磨滅のため不明瞭である。O06は口径16.4cmを測る。外面は薄く煤が付着し暗茶褐色を呈す。胎土は淡褐色で1mmほどの砂を少量含む。外面は横ナデ、内面は丁寧なケズリである。O05と共に上層から出土した。O07は復元口径10.4cmを測る。立ち上がりの短い二重口縁である。胎土は淡黄白色を呈し砂を多量に含む。焼成は軟質。調整は口縁と外面胴部はナデ。内面胴部はケズリを施す。肩部に羽状文を施す。O08は皮袋形土製品である。井筒最下層から端部の小破片が出土した。一枚の薄い粘土板を折り曲げて袋状にしている。胎土は細かく1mmほどの砂粒をわずかに含む。焼成は軟質である。外面は黄白色を呈しハケの後ミガキを施す。接合しない破片には沈線や表面の凹凸がみられ、内面は黒褐色を呈し粗いナデを施す。O09は小形の甕である。復元口径5.9cmを測る。外面は黒色、内面は暗茶褐色を呈す。胎土は精良で1mmほどの白色砂を多く含む他に細かな雲母片を多量に含む。O10は土製の紡錘車である。径5.83cm、厚さ1.4cm、重さ43gを測る。色調は淡褐色で一部黒色で光沢を帯びる。胎土中に白色砂をわずかに含む。焼成は軟質。O11は木製品で容器等の取手である。井戸の最下層から出土した。本体にスライドさせて差し込むものと思われる。出土時には差し込み部分の裏面に白色の顔料状の物質が付着していたため、漆喰のようなもので本体と接着させていた可能性がある。

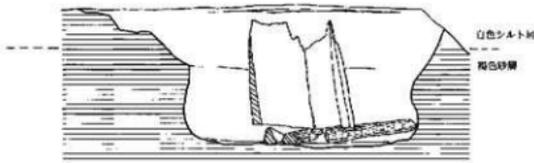


① 土層  
 ② 土層  
 ③ 土層  
 ④ 土層  
 ⑤ 土層  
 ⑥ 土層  
 ⑦ 土層  
 ⑧ 土層  
 ⑨ 土層  
 ⑩ 土層  
 ⑪ 土層  
 ⑫ 土層  
 ⑬ 土層  
 ⑭ 土層  
 ⑮ 土層  
 ⑯ 土層  
 ⑰ 土層  
 ⑱ 土層  
 ⑲ 土層  
 ⑳ 土層  
 ㉑ 土層  
 ㉒ 土層  
 ㉓ 土層  
 ㉔ 土層  
 ㉕ 土層  
 ㉖ 土層  
 ㉗ 土層  
 ㉘ 土層  
 ㉙ 土層  
 ㉚ 土層  
 ㉛ 土層  
 ㉜ 土層  
 ㉝ 土層  
 ㉞ 土層  
 ㉟ 土層  
 ㊱ 土層  
 ㊲ 土層  
 ㊳ 土層  
 ㊴ 土層  
 ㊵ 土層  
 ㊶ 土層  
 ㊷ 土層  
 ㊸ 土層  
 ㊹ 土層  
 ㊺ 土層  
 ㊻ 土層  
 ㊼ 土層  
 ㊽ 土層  
 ㊾ 土層  
 ㊿ 土層  
 ㉑ 土層  
 ㉒ 土層  
 ㉓ 土層  
 ㉔ 土層  
 ㉕ 土層  
 ㉖ 土層  
 ㉗ 土層  
 ㉘ 土層  
 ㉙ 土層  
 ㉚ 土層  
 ㉛ 土層  
 ㉜ 土層  
 ㉝ 土層  
 ㉞ 土層  
 ㉟ 土層  
 ㊱ 土層  
 ㊲ 土層  
 ㊳ 土層  
 ㊴ 土層  
 ㊵ 土層  
 ㊶ 土層  
 ㊷ 土層  
 ㊸ 土層  
 ㊹ 土層  
 ㊺ 土層  
 ㊻ 土層  
 ㊼ 土層  
 ㊽ 土層  
 ㊾ 土層  
 ㊿ 土層

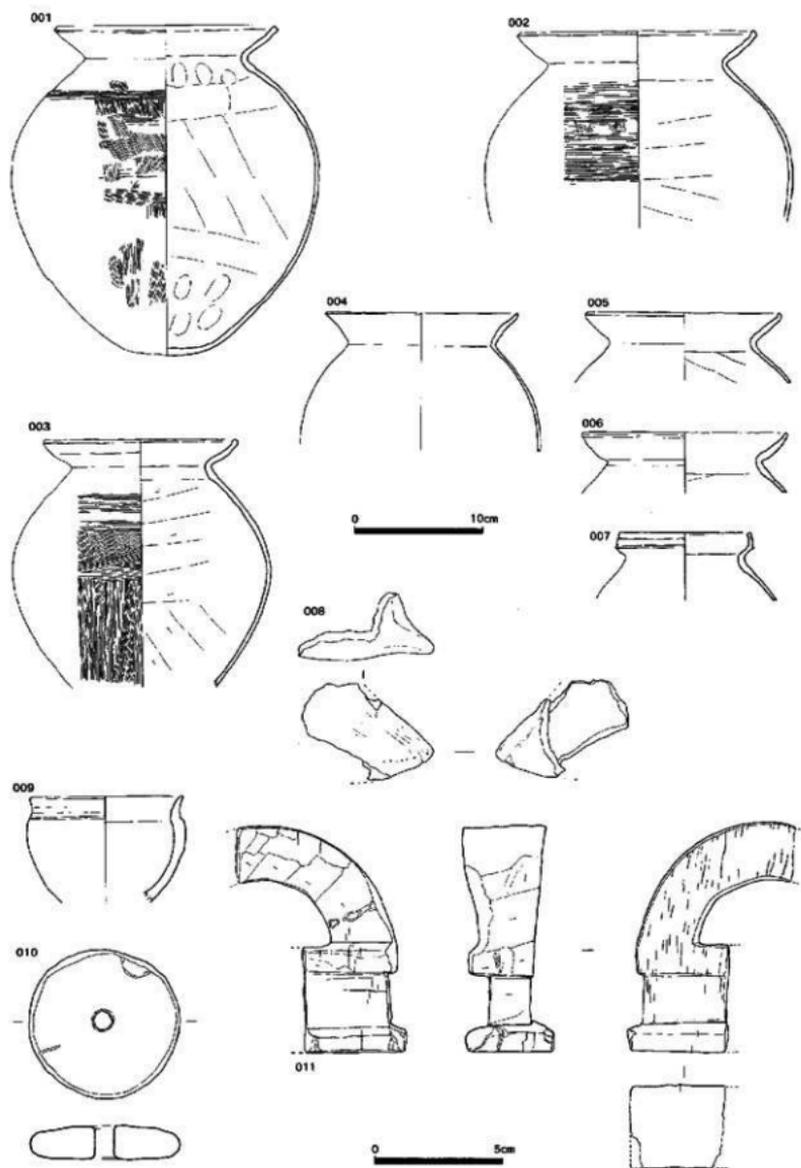


井筒内土層及び遺物出土状況

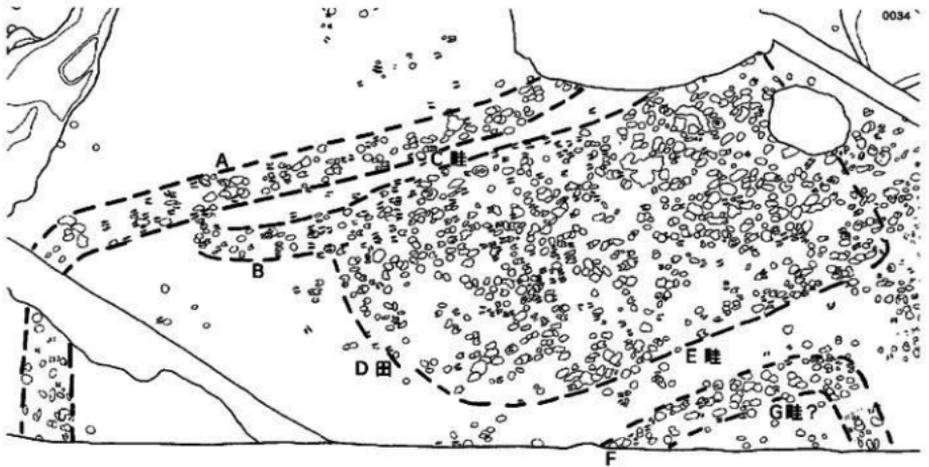
LH=11.50m



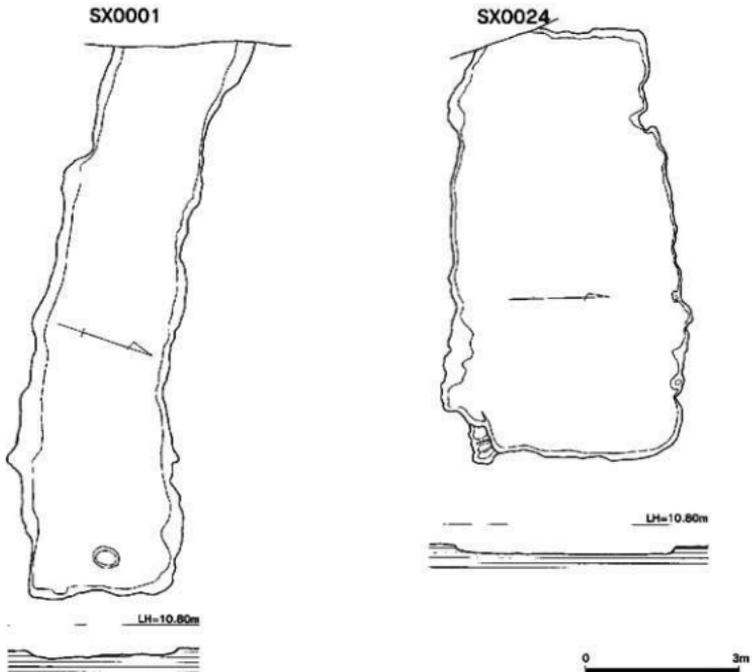
第6図 S.F.O.O.19実測図 (1/30)



第7図 SE0019遺物実測図 (001~007と011は1/4・008~010は1/2)



第8図 足跡痕跡実測図 (1/100)



第9図 SX0001・SX0024実測図 (1/100)

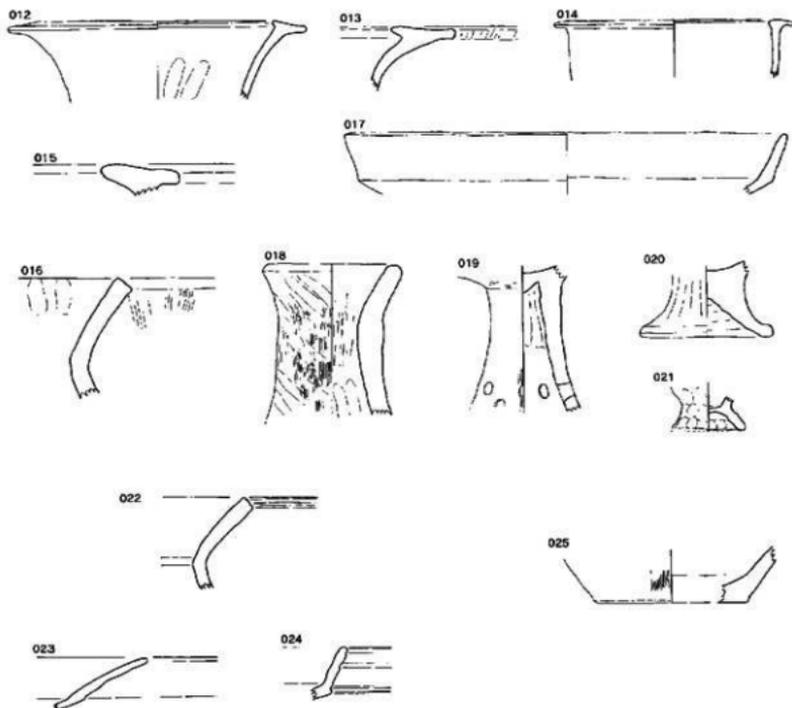
### (3) 溝

**SD0004** (第4図) 調査区の北東側で検出した。台地の落ち際に沿っており東側は調査区外に伸びる。現状で長さ420cm、最大幅110cm、深さ12cmを測る。底面に径50~80cmの円形の窪みがみられる。弥生時代末から古墳時代初頭と思われる土器小片が出土した。

#### 2) 古代~中世の遺構

**SX0001** (第9図) 台地の落ち際に等高線に沿ってのびる溝状の遺構で最大幅が3m、長さは現状で10.9mを測る。深さは15cmを測り、覆上は黒褐色粘質土で上に被さっていた黒色の包含層よりはやや明るめである。底面はほぼ水平であるが底面全体に径15cm前後の浅い窪みがみられる。

調査時点では床面の窪みが何であるか不明であったが、II区調査時に谷部でウシと思われる足跡痕跡が検出された結果、この遺構の窪みもウシの足跡であると考えられるようになった。遺物は弥生中期から後期にかけての上器が出土した。出土遺物(第10図012~021)。012は壺口縁である。復元口径23.4cmを測る。黄橙色を呈し、全体にナアを施す。014は甕、015・016は甕棺口縁である。017は二重口縁壺、018は器台、019・020は高坏である。019は脚部下半に円形の透かしを2段に穿孔する。019は台付きの椀か。外面は指オサエ、内面はヘラ状工具での研磨を施す。



第10図 その他の遺構出土遺物 (1/4)

**SX0024** (第9図) SX0001の南側に位置する。平面長方形を呈し、長径8.7m、最大幅4.7mを測る。底面は北側がやや下がったレンズ状を呈す。SX0001と同様底面全体に窪みがみられる。覆土は黒褐色土で弥生中期後半の土器片と共に後期前半の甕棺片、後期後半の高坏片などが出土した。褐色砂層に掘り込まれているため、全体に水が湧き出る。出土遺物(第10図O22~O24)。O22は大型甕棺口縁である。外面は斜方向のハケ後横ナデ、内面は斜め方向のハケを施す。O23は高坏口縁。O24は二重口縁壺である。

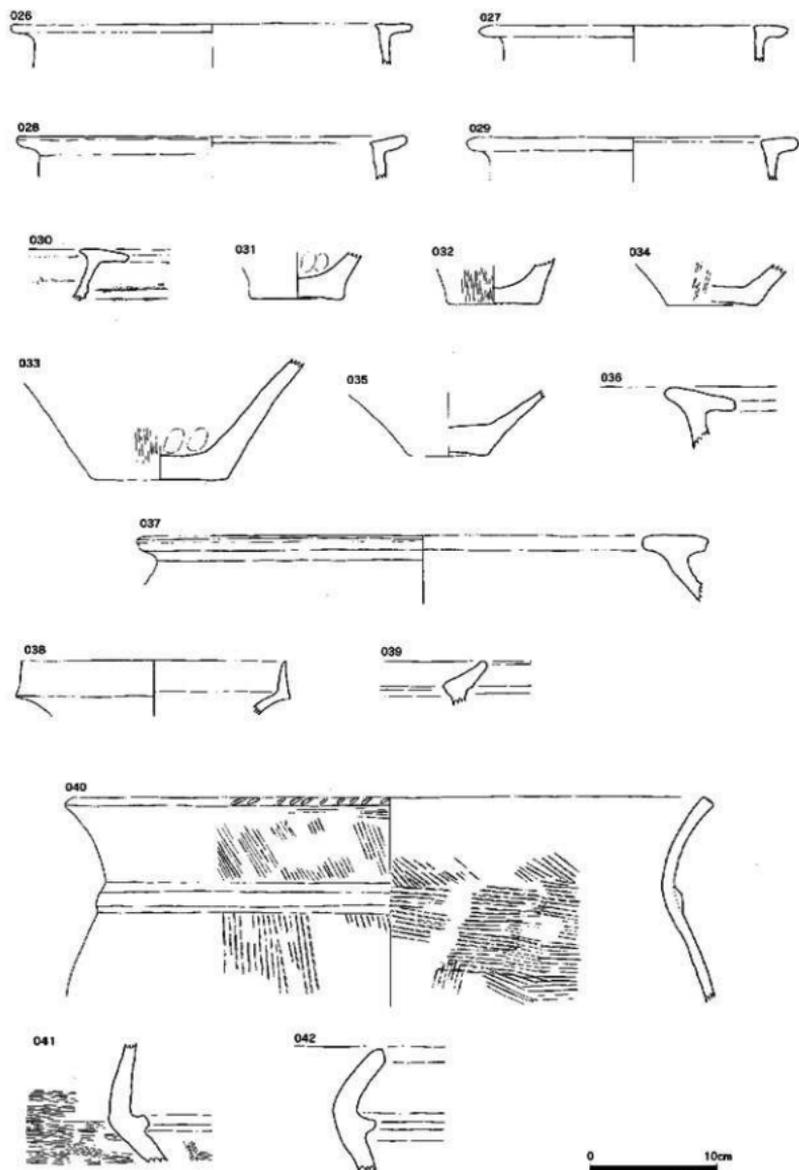
**SK0002** (第4図) 調査区北東側で検出した。平面は隅丸長方形で長径103cm、短径74cmを測る。断面浅皿状で深さ12cmを測る。覆土は上側3cmが暗褐色粘土で下層は暗灰褐色粘土である。出土遺物はなし。

**SK0016** (第4図) 調査区北西側で検出した。SX0001に切られる。隅丸の長方形を呈し現状で幅120cm、深さ13cmを測る。断面は浅皿状を呈す。弥生時代中~後期の土器小片が出土した。出土遺物(第10図O25)は弥生甕底部である。外面は茶褐色で、わずかに赤色顔料が残る。

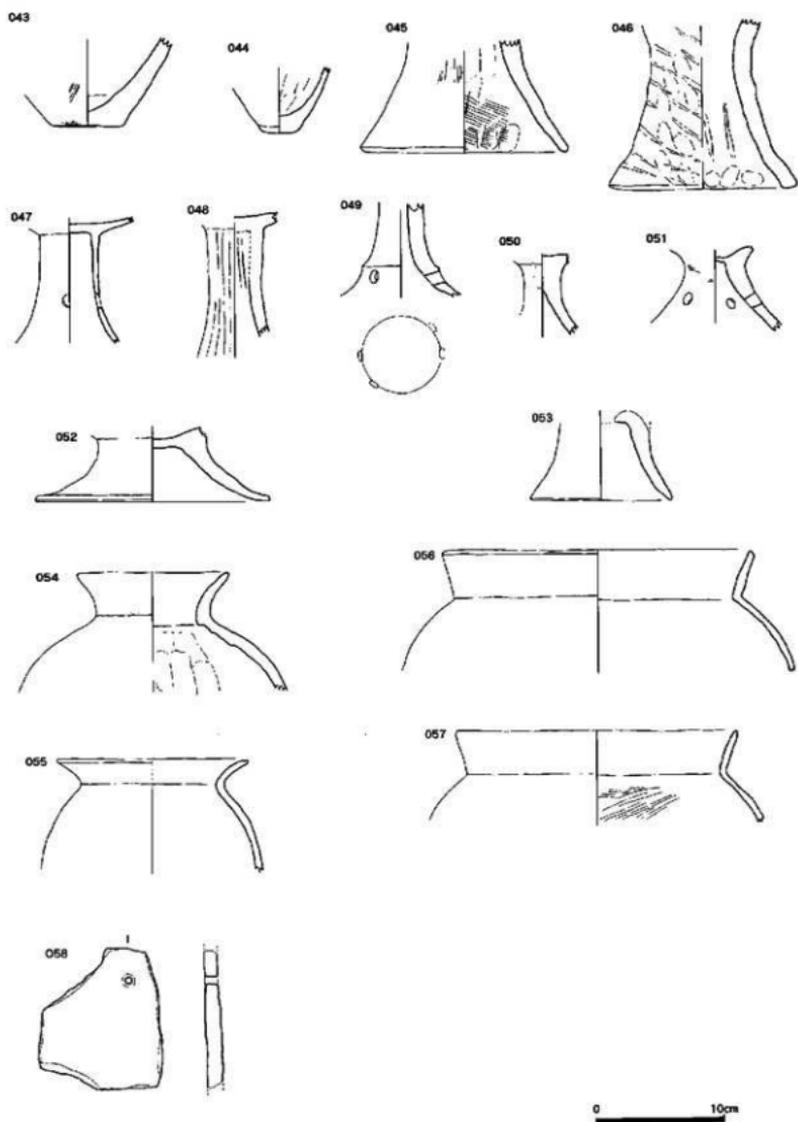
**足跡痕跡** (第8図) 調査区南側で検出した。調査区北側ではSX0001・SX0024の底面を除くとほとんど見られない。足跡は人間の足跡の他に偶蹄類の足跡と思われる先端がハの字形に開く足跡がみられる。時代は包含層の直下であるため古代から中世と思われる。当時日本に生息していた偶蹄類としてはウシ、イノシシ、シカが考えられるが第2・3指の蹄の長さが6cmと長いことからウシのものである可能性が高い。また足跡はA・Fの様な直線的な部分とDの集中する部分があり、その間にはCやEの様に幅50cm程の足跡がほとんど見られない部分がある。また、Dの集中部分の中にも幾筋か直線的な動きが見られる部分があり、これは足跡痕跡がみられない部分が畦でその東側の集中部が水田であり、田起こし時の足跡が残っているものと考えられる。

### 3) 包含層出土遺物(第11~19図)

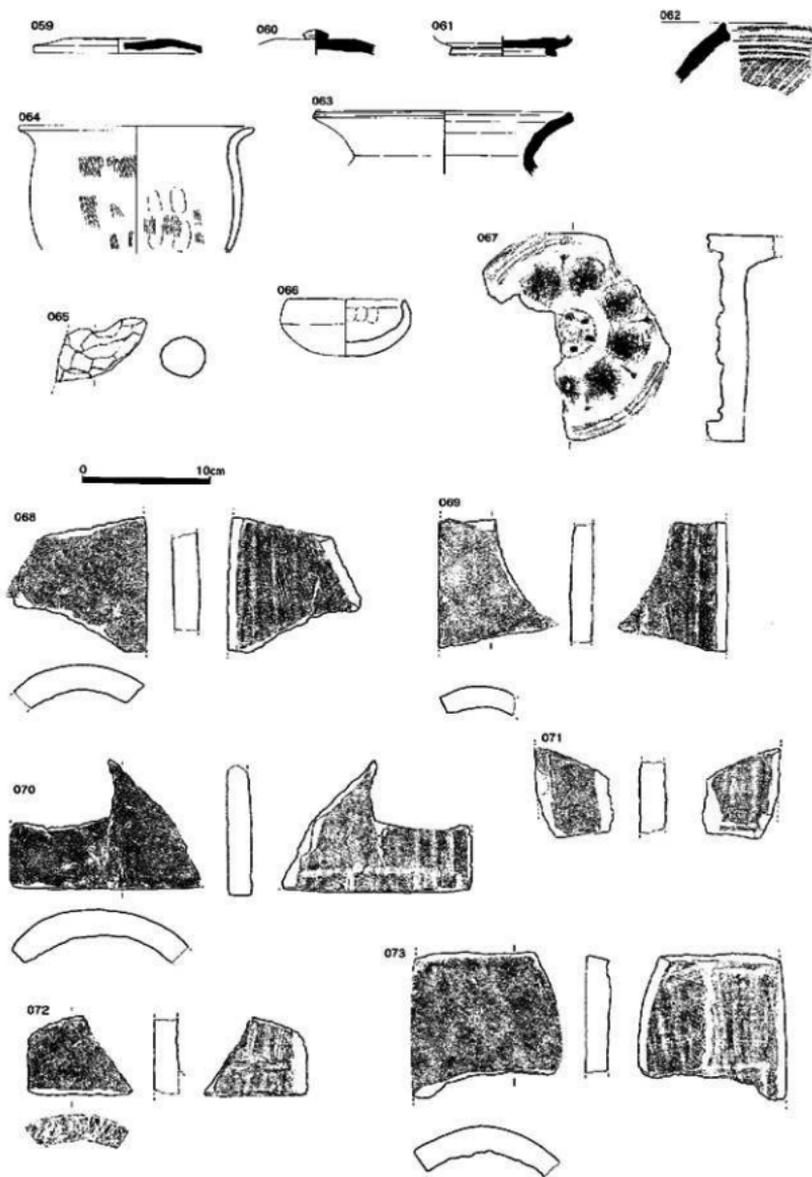
谷部に堆積した黒色土中から多量の遺物が出土した。包含層は厚さ20cmを測る。遺物が含まれていたのは台地端から約15m程で、南側のII区の黒色土中にはほとんど含まれていない。遺物の時期は弥生時代中期中頃から古墳時代初頭までと7世紀末から8世紀前半の2時期の遺物がほとんどを占める。O26~O37は弥生時代中期の土器である。O26~O29は甕口縁である。O26は復元口径31cmを測る。O30は壺口縁の小片で内外面とも丹の痕跡がみられる。O31~O33は甕底部である。O34・O35は壺底部でO34は表面に丹塗研磨を施す。O36・O37は大型甕棺口縁である。現在までの調査で弥生時代の甕棺墓は、台地北端の16次調査と台地中央の23次調査で検出されているが、いずれも中期中葉の汲田式の甕棺墓群でその前後の甕棺を使用した帛域は確認されていない。しかし今回包含層からまとまって出土したことから、台地東側部に甕棺墓群の一つがあった可能性が出てきた。多くは後世の開発によって破壊されていると思われるが同時期の竪穴式住居も残っているため、将来発見される可能性は高いものと思われる。O36の胎土は砂を多く含む焼成は良好。O37は復元口径45cmを測る。胎土は黄褐色で粗砂を多く含む。O38~O58は弥生時代後期から古墳時代の遺物である。O38は二重口縁壺で復元口径は22cmを測る。O39は甕で口縁が斜めに立上がる。横ナデを施す。O40~O42は甕棺である。O40は復元口径51cmを測る。鈍い橙色を呈し、全体に粗いハケ目、口縁端には刻み目を施す。O43・O44は甕底部である。O44は内面にヘラ状工具によるナデ、外面は指押さえ後ナデを施す。底部はレンズ状にふくらむ。O45・O46は器台である。O46は全面に絞り痕がみられる。O47~O52は高坏である。O53は器台もしくは高坏である。O54~O57は壺である。O54は復元口径12cmを測り内外面ともナデを施す。O58は厚さ1.2cmの板状土製品で焼成前に径6mmの穿孔を施す。表面は橙色と褐灰



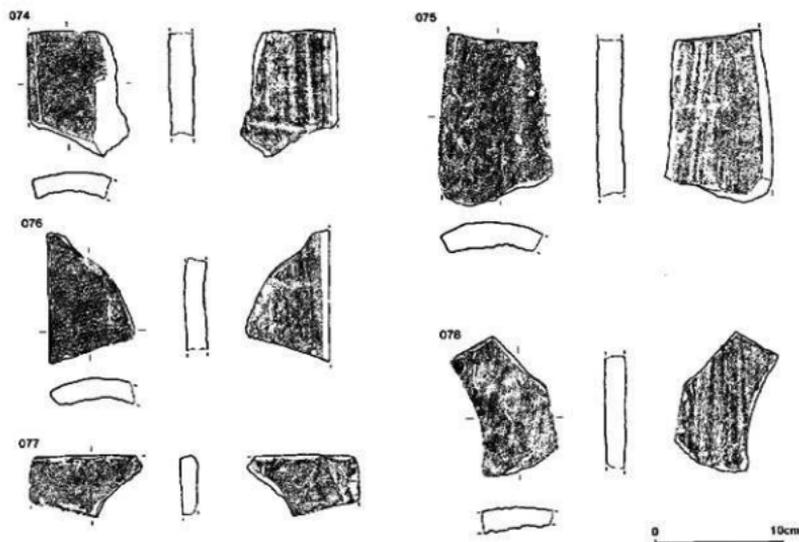
第11圖 包含層出土遺物 1 (1/4)



第12圖 包含層出土遺物2 (1/4)

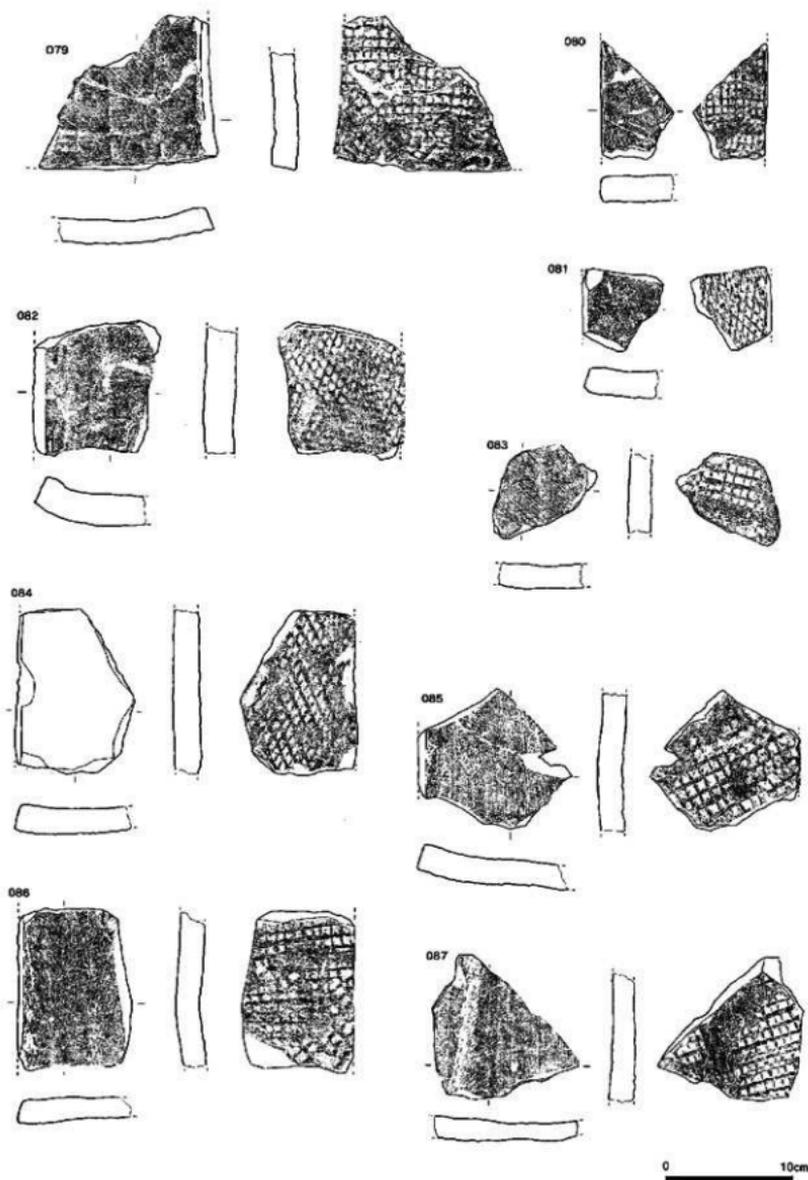


第13圖 包含層出土遺物3 (1/4)

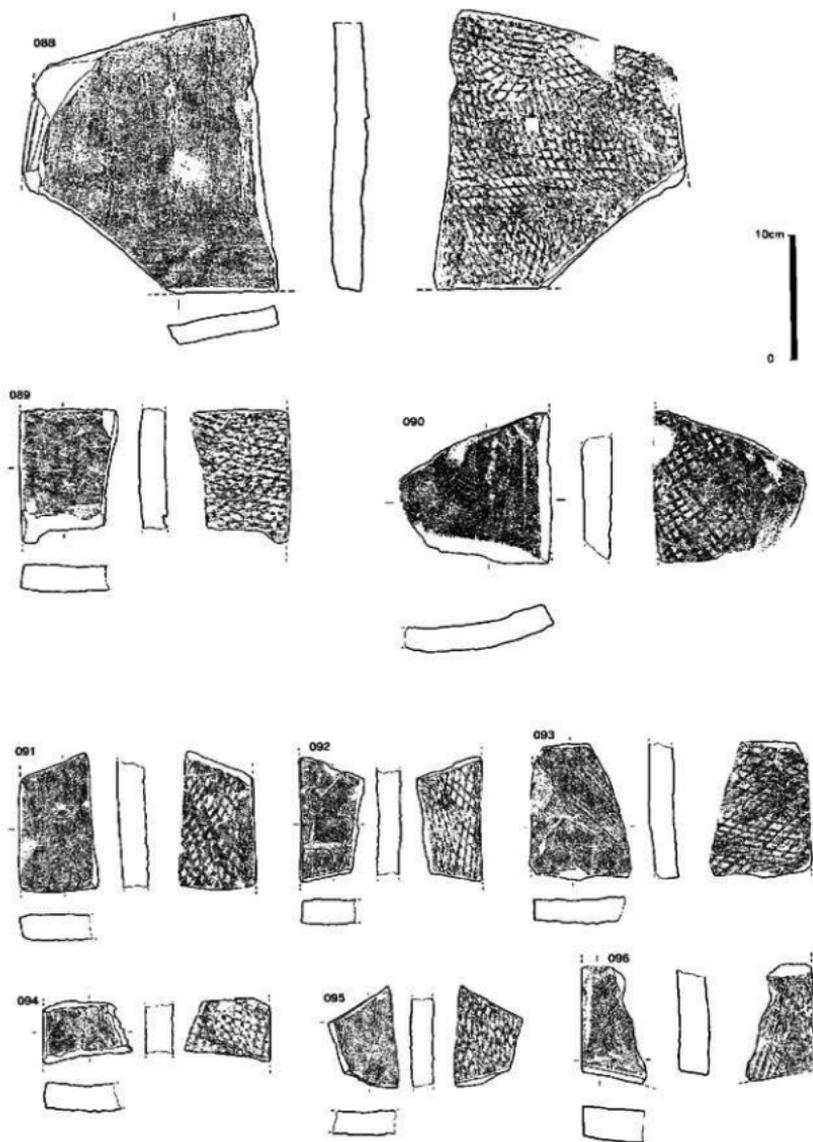


第14図 包含層出土遺物4 (1/4)

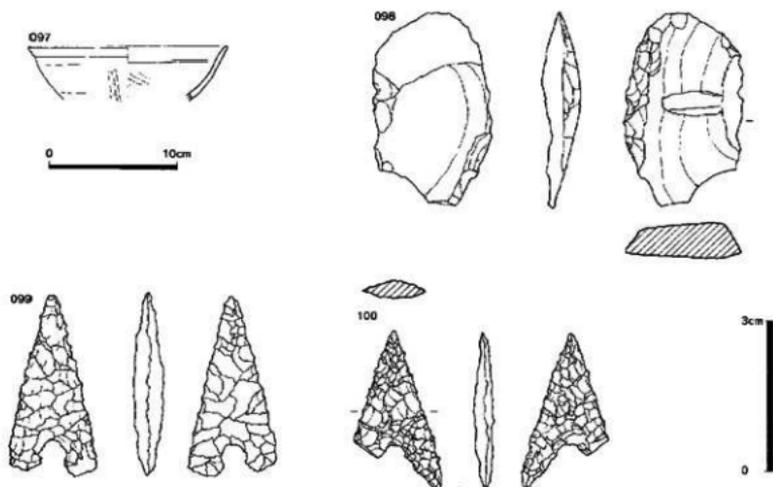
色を呈し、胎土は径4mm以下の砂粒を多く含む。周囲がすべて欠けているため形・時期は特定できないが胎土は弥生末の土器に似るものである。059～097は古代以降の遺物である。059・060は須恵器坏蓋で、059は復元口径13cmを測る。061は須恵器高台坏、062・063は須恵器甕口縁である。064は土師器甕で復元口径18.5cmを測る。065は甕取手である。066は土師器坏で復元口径約9cm、器高4.5cmを測る。にぶい橙色を呈し胎土は細砂粒を含む。内面にわずかに丹の痕跡が残る。067～096は瓦である。067は軒丸瓦である。百濟系の単弁瓦で瓦当部は径16.5cm、厚さ2cmを測る。弁のかえりはそれほど強くないものの間弁の尖りは強い。瓦当部分は灰色を呈し胎土は2mmほどの白色砂を多く含む。068～078は丸瓦である。調整は凸面は全体にナデを施す。凹面は布目圧痕で竹状模骨の筋がみられる。079から096は平瓦である。調整は凸面が格子及び斜格子を主とし、わずかにナデを施すものがみられる。凹面は布目圧痕の上からナデを施すものが多いが、089～093の様に一部にはケズリを思わせる強いナデを施すものがみられる。コーナー部分が残るものは少ないが直角のもの他に096の様に鈍角をなすものがある。097は青磁破片である。復元口径15cm、胎土は灰白色、釉は半透明のガラス質で全体に貫人がみられる。098は安山岩製の搔器で長さ7.7cm、幅4.6cm、重さ53gを測る。099・100は石鏝である。099は長さ3.7cm、幅1.7cm、重さ1.95gを測る。暗灰色を呈し、姫島産の黒曜石と思われる。谷部の足跡痕跡中から出土した。100は黒曜石製の石鏝である。基部の片方が欠損しているが現状で長さ3.1cm、重さ0.84gを測る。101は石包丁である。安山岩製で暗茶褐色を呈す。長さ15.8cm、幅5.3cm、重さ101gを測る。102は石包丁の未製品もしくは再利用品と思われる。両面に粗い研磨痕が残る。103は石製紡錘車である。径5.5cm、孔の径6mm、重さ37.2gを測る。104は石叉である。玄武岩製で暗灰色を呈す。中央から先端部を欠く。現状で長さ6.4cm、幅5.2cm、重さ56g



第15圖 包含層出土遺物5 (1/4)



第16圖 包含層出土遺物6 (1/4)

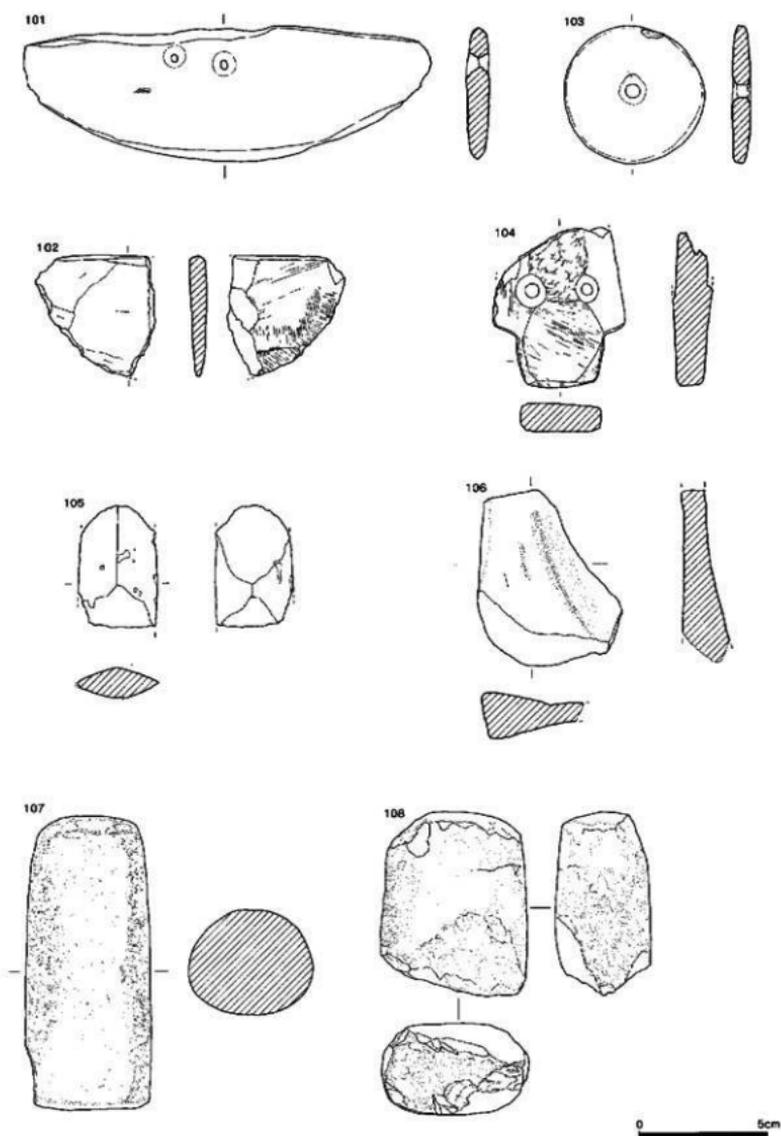


第17図 包含層出土遺物7 (097は1/4・098は1/2・1/1)

を測る。105は石剣である。安山岩製で濃灰色を呈す。先端と基部を欠く胴部のみで現状で長さ4.9cm、幅3cm、重さ18gを測る。中央に明確な鏃がみられ断面は菱形を呈す。106は砥石である。粒の粗い砂岩で灰黄色を呈す。107・108は敲石である。107は玄武岩製で長さ11.8cm、長径4.8cm、重さ476g。108は砂岩製で長さ7.3cm、長径5.7cm、重さ252gを測る。109は鋳型である。石英長石斑岩製で熱を受けたためかやや脆い。現状で長さ7.7cm、幅4.8cm、厚さ4.4cm、重さ221gを測る。まず、図の左面を鋳型として使用している。現状で青銅製品の形状は半円形を呈し、図の下側では円の縁に沿って幅8mm、高さ1mmの帯状の高まりがあり、これが製品の端になるものと思われる。左端では高まりが切れるためこの部分が溝口である可能性がある。その後鋳型を削り、割り面(図中央)に鐵の鋳型を掘りこんでいる。鋳型は図の上側が欠損していることや鐵先端部のカーブが緩やかになることから連鋳式である可能性がある。鐵は長さ約6.5cm、幅2.6cm、基部径7.5mmを測る。包含層からは鋳型に使用された石英長石斑岩の破片が出土している。(図版5 111~113) 111は長さ9.2cm、112は3.9cm、113は6.5cmを測る。以前の調査でも破片は多く出土している。

### 3. 小結

本調査地点は台地の東側に解析した谷の中に位置する。本調査区で出土した古い遺物は縄文時代中期まで遡ると思われる黒曜石製の石鏃である。この時代の遺構は本調査区のみでなく周囲の調査でも確認されていない。遺構は古墳時代初頭の井戸に切られる樫立柱建物が最も古く、弥生時代のものと思われる。古墳時代の遺構としてはSD0004とSE0019がある。SD0004は台地落ち際を巡る溝で底面に径50cm前後の窪みが連続してみられ、布掘りの横列である可能性がある。井戸は弥生時代後期の井戸が第17次調査で出土しているが、いずれも台地上に数基ずつ集中し、深さも4



第18圖 包含層出土遺物8 (1/2)



第19図 包含層出土遺物9 (2/3)

mを測るのに対し、本地点の井戸は台地の一段落ちた部分に1基のみ位置し、深さも80cmと浅い。井戸の周囲にはそれ以前の柱穴が残っているため削平を受けたとしてもわずかであり、短期間の間に急激な変化が起きている。そしてこの時期を最後に井尻B遺跡からは生活遺構はなくなり、あとは台地南半に5世紀末の古墳が見られるのみである。

11次・17次調査等の周辺調査で確認されている遺構は弥生時代中期前半から中葉、後期前葉などがみられるものの、後期後半から終末が圧倒的多数を占めている。しかし、今回包含層から出土した遺物は遺構数が少ない中期中葉から後期中葉の遺物も多く出土している。特に遺構が確認されていない中期中葉以降の甕棺の破片が多く出土しているが、この時期の遺物は弥生後期や古代の遺構からも多く出土するため、後世の開発でほとんど破壊されている可能性がある。

古代の遺物は須恵器の他に瓦片が多く出土している。いままでも瓦が出土したのが西鉄大牟田線沿いなのに対し、今回の調査はそれから約200m程離れている。丸瓦は無段で凹面に竹状模骨の痕跡が見られること等の特徴や同時に出土している須恵器の時期から、第3次調査の溝出土の瓦と同時期の建物と考えられる。包含層にはこれら弥生時代と古代の2時期の遺物が見られるが、両者は混在しており分層はできなかったため、後世の整地などである可能性があり、包含層中から若干の青磁碗片が出土することから整地の時期はそれを上限とするものと考えられる。今回の道路建設により周辺の調査が増加する可能性があり、これからの調査に期待したい。



1. I区全景 (南から)



2. I区台地際 (西から)



3. SK0002 (南から)



4. SBO1 (北から)



5. SK0001・SK0024 (西から)



6. SK0001底面凹凸状態 (東から)



1. SD0004 (東から)



2. SEO019上層土器出土状態 (北から)



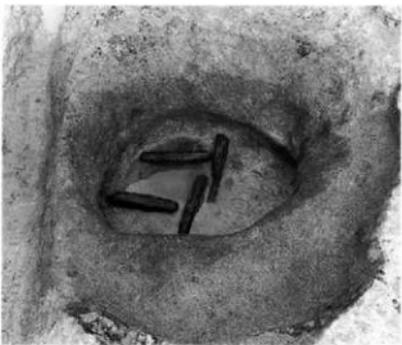
3. SEO019下層土器出土状態 (西から)



4. 井筒掘り上げ状況 (東から)



5. 掘り方土層断面 (西から)



6. 掘り方完掘状況 (西から)

図版3



1. II区全景 (北から)



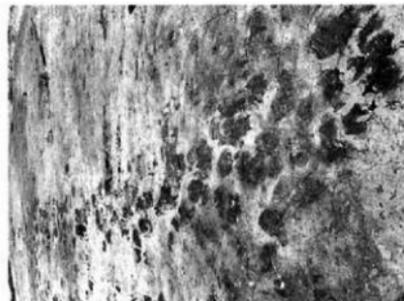
2. II区全景 (南から)



3. 足跡痕跡 1



4. 足跡痕跡 2



5. 足跡痕跡 3



6. 足跡痕跡 4



011



011 上から



010



110



008



011 下面

109



103



099



100



101



102



104



105



111



112



113



## 井尻B遺跡11

—井尻B遺跡第14次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第736集

2003年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
☎092-711-4667

印刷 株式会社 三光  
☎092-475-6271

